



完成した実習橋で記念撮影する受講者と講座協力者 撮影/中村まさあき
熊本県上益城郡山都町城原岩立(緑地広場内)に2011年12月架設、径間4m、橋幅1.8m

日本の石橋を守る会主催
「肥後種山石工技術継承講座」実習橋
城原岩立橋(仮称)
種山石工の技術を次世代に

新しいめがね橋が2011年12月、熊本県上益城郡山都町城原岩立の緑地広場内に架かった。肥後種山石工技術継承講座(日本の石橋を守る会主催)の受講者たちが、実習のために架設した輪石と縁石だけのアーチ橋だ。径間4m、橋幅1.8m、石材は主に山鹿市産の溶結凝灰岩「鍋田石」が使用されている。

講座は石造アーチ橋の構築・修復技術者の育成を図る目的で開催された。応募者の中から6人の受講者が選ばれ、開講式が行われた。2011年8月20日から12回の講座が開かれ、12月10日に閉講式が行われた。

開講式には、上益城地域振興局局長や熊本県教育庁文化課課長などの来賓、受講者と関係者約60人が出席。甲斐利幸・本会会長が「石橋や石橋のある景観を大切にしていきたい」と、受講者は技術習得に努めてもらいたい」と激励した。

講座は座学と実習により構成され、肥後種山石工技術保持者の竹部光春・石工師匠をはじめ、石造アーチ橋の架設を理論や技術面でリードする第一線の講師が集まった。九州橋梁・構造工学研究会(KABSE)顧問の戸塚誠司氏、東陽石匠館館長の上塚尚孝氏(事務局長・本講座実行委員長)、NPO法人熊本技術士の会会員で地質情

報管理士の岩内明子氏、熊本城の石垣修復技術者の木下浩昭氏、熊本大学大学院自然科学研究科教授の山尾敏孝氏(会員)、九州文化財研究所主席研究員の村幸史郎氏(会員)、KABSE会員の村秀樹氏(会員)、技術士の軸丸英頭氏(会員)、通潤橋等の修復技術者の尾上二哉氏(会員・本講座実行委員)など。

実習で受講者たちは、石材の採取や、伝統的の石工道具を使って石を割る、はつるなどを体験。竹部師匠と尾上氏の指導により、山都町緑地広場内の池に石造アーチ橋の架設を試みた。支保工の設計は尾上氏が担当し、受講者たちは基礎石据え付けから輪石加工、支保工据え付け、輪石組み立て、縁石取り付けまでを体験した。

当初プログラムには、めがね橋架設実習の予定はなかったが、土木・石材業に従事していた受講者の基礎知識と技術力を竹部師匠と尾上氏が認め、格安で石材を調達できたなど、石橋架設環境が整ったため実現した。

事務局では講座開催にあたり、7月9日に初めての準備会議を開催し、12回の講座開催のために計9回の準備・見直し会議を開いた。開・閉講式、座学と会議は、山都町立図書館の協力により、同館1階ホールの使用ができた。関係者の協力と努力に敬意を表し、受講者の今後の精進に期待したい。(広報部)

(次面につづく)

中面の案内

2面 肥後種山石工技術継承講座 記念座談会
5面 珍構造、宮崎の2橋

4面 野中町の石橋(末永 暢雄)
6面 めがね橋の構造と強さ[1](軸丸 英頭)

肥後種山石工技術継承講座

「肥後種山石工技術継承講座」は12回の講座を修了した。本講座の発案から開講、実習橋完成、閉講までを振り返ってもらうため1月29日、山都町の「通潤山荘」で、講座開催の関係者である肥後種山石工技術保持者の竹部光春氏、実行委員の尾上一哉氏、山都町立図書館館長の下田美鈴氏による記念座談会を催した。聞き手は広報部の中村まさあき。



左から、下田美鈴氏、竹部光春氏、尾上一哉氏（撮影／中村まさあき）

材自体に少し欠落した部分

竹部 アーチを造るため、石材をくさび形に加工したのですが、受講者の技術が未熟なため、接合部が緩く、石

面を歩きやすいですからね。

尾上 橋本勘五郎さんが架けた熊本市の「明八橋」が拱矢比0・194、実習橋はそれより扁平な0・134です。実習時間の制限から、壁石を積む時間がありませんでしたので、構造が見える輪石だけの「裸の橋」にしました。それに扁平な方が、橋

扁平なアーチですね。

——実習橋は径間4坪。大変

記念座談会

本田和幸さん 何から何まで初めての経験でした。現場でしか身に付けられない技術があるということを感じました。もっと実習をやりたかったという思いが残っています。

荒木大人さん 実践が一番勉強になりました。実習で少しだけ壁石を積む練習をしましたが、時間の都合であまりできなかったことが心残りです。さらに実践を重ね、技術を磨ければと願っています。

受講者コメント

閉講式にて

山下勇輔さん 修復により、埋もれた石橋を再生したいと思っています。そのためにも経験が必要です。今後は技術者の立場から石橋を見つめ、さらに勉強していきたいと思えます。

藤原孝史さん 地元の石材店に勤めていますが、機械を使うことが当たり前でした。今回は改めて石を扱う難しさ、手作業の大変さを実感しました。また

次のステップを与えていただければと思っています。

山崎博さん 土木関連の仕事をしています。石の扱いとともに支保工の重要性も深く考えさせられました。技術を一つひとつ習得し、また石橋を造りたいです。

木庭正直さん 私は受講前まで石に携わることがなかった者です。身につけていないことが多いので、また機会を得たいと思います。



閉講式での受講者。左から山下勇輔さん、藤原孝史さん、山崎博さん、木庭正直さん、本田和幸さん、荒木大人さん（撮影／中村まさあき）

講座の様子

▼10/8見学と実習

熊本城の石垣を見学後、石垣修復を担当する天水町の石工、木下浩昭さんの指導により、城内にある実習用石材（安山岩）を使って石割りを行い、溶結凝灰岩との違いを体験した



▲10/1実習

採石場を訪れ、竹部師匠の指導で石割りの実習。石材（溶結凝灰岩）の“石の目”を見つけ、矢穴を掘り、そこに鉄製の矢を入れ、矢を玄翁（げんのう）でたいたいて石を割り、その雑割石の形を整えた

▼8/20座学

肥後種山石工技術保持者の竹部光春・師匠と東陽石匠館の上塚尚孝・館長の説明で、霊台橋や西田橋など、竹部師匠が手掛けた修復等の記録画像に見入る受講者たち



もありました。それで私がす
き間に鉛片を打ち込み、全体
を締めました。私が担当した
鹿児島県の「西田橋」移設・復元
工事では、石材のすき間から
刀のような形の鉄片が出て
きました。岩永三三郎さんの
仕事だと思われませんが、私は
さびない鉛を使います。それ
にしても受講者は初めてア
ーチを架けたわけですから、
私は及第点をあげたいと思
います。

— 講座の発案者は尾上さ
んだと聞いています。

尾上 「霊台橋」「通潤橋」
などの石橋を架けた種山石
工の技術の正統な継承者は、
現在では竹部光春・師匠だけ
になっています。昨年、山都町
教育委員会から「文化遺産を
活かした観光振興・地域活性
化の助成」の話聞き、上塚
尚孝・事務局長、甲斐利幸会
長に相談し、竹部師匠のご協
力を得て、本会の主催でやる
ことになり、全てがタイミン
グよく決まってきました。

竹部 私は3年前に現役
を引退し、78歳になりました
た。この先石橋の修復を誰が

やるのかと、寂しい思いでい
たところ、今回の話があった
ので、大賛成でした。

下田 私の家は通潤橋の
水の恩恵を受けている農家
なのです。しかし最近、漏
水がみられるという話を聞
き、修復技術者がいないと、
どうなるのかと不安に思っ
ていました。それで私も、この
講座の後押しをしたいと思います。

— 講座を振り返り、どんな

石橋修復専門家集団養成へ 尾上氏 先人に顔向けできる職人に 竹部氏 石工技術継承を応援したい 下田氏

感想をお持ちですか。

竹部 最初は6人もの受
講者を教えられるだろうか
と思いましたが、石橋に詳し
い会の専門家の方々のご支
援があったおかげでやり遂
げられました。講座が終わ
り、私は橋本勘五郎さんのお
墓に参り、感謝の気持ちを述
べてきました。受講者には今
後、自ら技術を習得する姿勢
が求められます。種山石工の
先人に顔向けできる仕事が

できるよう精進し、信頼され
る職人になってもううことが
私の願いです。

下田 種山石工の技術を
継承する講座に関われたこ
とは喜びでした。また技術者
は、何度も石橋を架ける体験
の中で、勘や技術が向上する
ことを知りました。竹部先生
のお元気づちに、今後も講
座が続いていくことを、強く
願っています。

尾上 未熟とはいえ、石橋

を架けることができると思
える人が6人増えたことは
大きな成果です。私は多くの
人に石橋の価値を理解して
もらい、石橋を地域づくりの
推進力にしていきたいと考え
ています。今後については、石
橋修復、復元、新設などの案
件があります。それを6人の
受講者に体験させ、より多く
の経験から技術を習得して
もらいたいと思っています。
将来は文化財指定石橋の修

復専門家集団として広く認
知され、全国から引き合いが
あるような地域産業に育て
たいと思っています。

— 受講者6人は、さらに経
験の機会を得て、技術を磨き
たい希望を持っていました。
今後の展開に期待が膨らみ
ます。最後に本日は参加する
ことができなかった、上塚尚
孝・実行委員長にコメントを
もらいたいと思います。

(1月29日)

実習橋架設は快挙 上塚氏

受講者6人中5人が、石割
り初体験だったと聞きます。
彼らは矢穴掘り・石割り・面
削りに熱心で、雑割石並べも
竹部師匠の指導を忠実に守
り一生懸命。見直し会議では
“実習橋を架ける” 目標を
設定。小規模ながら、日本で
最新の石造アーチ橋ができ
たことは、快挙と言えます。

それにしても、実習現場を
見ていると、昔のめがね橋架
設関係者が知恵を絞り、汗を
流し、永代不朽の橋実現に取
り組んだ姿と重なるようで、
先人の仕事に頭が下がる思
いでした。(2月4日)



▲12/10閉講式後の記念撮影
支保工に据えたジャッキを下げると、輪石が
連結。支保工を撤去し、縁石、親柱などを取
り付け、実習橋が完成。写真は竹部師匠(手
前中央)と受講者6人

▼11/12実習

ジャッキアップされた支保工の上に、橋の両
側から順に、アーチの角度に合わせて、くさ
び形に成形した輪石を並べ、最後、中央に要
石が落とし込まれた



写真提供/尾上一哉、中村まさあき



▲11/5実習

支保工の組み立て作業。実習橋架設期間
中、天候には恵まれなかった。この日も小雨
が降る中、受講者たちは黙々と作業を進め
た

野中町の石橋

副会長 末永暢雄(長崎県)
イラスト/すえながのぶを

昨年11月、佐世保市街北部を流れる相浦川沿いにある、土留めのための高い要壁に空いた暗渠(あんきよ)に入った。

ここは旧国道204号線に当たる。国道の路肩の石垣がわずかに膨らみ、そこに御影石の銘板がのぞいている。浮彫で「明治三十八年三月竣工」と記されている。郷土史家の間では、これが石橋だとされている。

高さ140センチほどの暗渠の中を背を曲げて進むと、頭上は大きな石桁の列。前方にはMR鉄道(前身国鉄)のコンクリートアーチ橋梁が見え、まぶしい明かりが差し込んでくる。5センチほどを進むと、急に頭上がアーチになった。コンクリートではない。そこに石造アーチ橋が架かっていた。

道路側(下流側)は石桁が低くなっており、アーチのほんの一部しか見えなかったが、鉄道のRCアーチ橋からは、完全にこの石橋の姿を見ることができると。その姿が目に入った時、思わず大きな声が出、それからは声をなくした。

不思議なアーチの形

何とも不思議な形状のアーチだった。環厚が一定ではない。つまり、輪石が一定比率のもとに台形に削られ、ぐるりとアーチをつくるという概念のアーチ橋に

なっていないのだ。



不思議な石積み

この形状には覚えがある。京都市の「萬世橋」(1884年ごろ)や「下立売橋」(1874年)も同じ工法だった。しかし私はまだ、九州にこうした石橋を見たことがない。

もう一つの驚きは、道路側に見えていた銘板のちよつど反対側に、全く同じ大きさの御影石の銘板があり、そこには次のような陰彫文字が読めた。

長崎縣技師 東島權次郎設計

長崎縣屬 松本松之丞

長崎縣工手 木村廣楠董工

しばらくあつげにとられて見上げてみると、疑問が多く湧きあがつてくる。
①なぜ県によつて架橋されたのか②なぜここなのか③橋幅が狭い(1×1.65センチ)のはなぜか④設計者のこの形状の架橋技術はどこから。

かつて佐世保は小さな漁村だったが、佐世保鎮守府が置かれ、明治22年には海兵団の基地となり、周辺で石炭産業が興り、明治38(1905)当時の佐世保は、今では考えられないほど急速な発展を

遂げていた。とはいえ、長崎県がここで橋梁工事を行うだけの背景は見えてこない。「佐世保市史」等で丹念にその当時を調べていくと、次のことが分かった。

明治37(1904)年、佐世保市は1年間に3度も大雨による大きな被害を受けている。この橋一帯は、同22年に改修され、里道や送灰の鉄道馬車が敷設されていた。後に里道は国道、鉄道馬車は軽便鉄道となり昭和に国鉄になった。地形から観察すると、どうやらこの道路等が、地崩れによつて大きな損壊を受けたと考えられる。その後旧工事に、県が乗り出したのだと、私には思われた。

設計技師、東島權次郎という人は一体どうした知識によつてこうした形状のアーチを設計したのか。長崎の石橋関連では聞かない名前だ。追跡調査中ではあるが、面白い史料を見つけた。

それは明治37年に建築家、下田菊太郎が設計した長崎市にある、石造りの洋館「旧香港上海銀行」(国指定重要文化財)。この建物には石造のアーチ門(拱門)が造られている。

鉄道馬車が通る橋

野中町に残っている石橋のアーチ形状は、この門に似ている。東島氏もこの洋館の建設に関わり、そこからこのアーチの形状を設計したのではないか、そんなことも考えている。

この橋には親柱も欄干も見あたらな



鉄道馬車が通った時代の想像図
(三池炭鉱の送炭鉄道馬車の映像を参考に制作)

いため、橋の名は不明。一般道としては1.65センチと道幅が狭過ぎる。そばを旧国鉄(現松浦鉄道)が走っている。それらのことから私は、これは一般の橋ではないと推量。先記した歴史的な背景から判断し、これは当時の「鉄道馬車」、後の佐世保軽便鉄道の橋梁だったのだ。

長崎県北地域は明治から昭和にかけて、採炭によつて大きく発展してきた。その遺構は数多く残るが、保存や継承活動はほとんど行われていない。そういう意味からも、この石橋は大変貴重な遺構であり、佐世保市に何らかの手立てをしてほしいと要望しているが、市民にはなかなか見ることができない位置にあり、どうしてもいいものと思案中である。

BBS(ネット掲示板)より 珍構造、宮崎の2橋

日本の石橋を守る会BBSへの投稿の中から、ここでは宮崎県の贄田岳和・会員が2012年1月11日に投稿した、珍構造の2つの石橋、宮崎県の「高松橋」(仮称)と「桂ヶ谷水路橋」(仮称)を取り上げる。(広報部)

写真とデータ提供/贄田岳和

輪石が突き出た橋

高松橋(仮称)

所在地 宮崎県串間市高松

(国道220号)

橋幅 下幅5・45㍎
上幅4・18㍎
径間 3・0㍎
拱矢 1・6㍎
環厚 36㍎44㍎



基部の輪石が順に突き出し台形をした高松橋

上流右岸から見た高松橋の輪石



高松橋はまず、その輪石の形状に目を引かれる。アーチが基部になるにつれ、石材の端が少しずつ順に、壁石の面より外に突き出ている。そして橋全体のかたちは、橋面の幅(上幅)よりもアーチ基部の幅(下幅)の方が広くなつた、台形をしている。

このような構造について、技術士の軸丸英頭・熊本県会員は「直感的な印象」としながら、「アーチ構造の弱点を補い、安定性を高めることにながる」とみている。

贄田会員からの情報では、

このように輪石をずらして造られた台形のアーチ橋は、宮崎県ではえびの市の「てこ橋」、小林市の「石氷東橋」があるといつ。

斜めに架かる橋

桂ヶ谷水路橋(仮称)

所在地 宮崎県都城市山之

口町桂ヶ谷(六十田

一之渡・新田みぞ)

天端幅 1・5㍎
下幅 2・1㍎
橋長 8・5㍎
径間 5・5㍎
拱矢 3・3㍎

川と水路が交差する場所に架けられた桂ヶ谷水路橋。この橋の特色は、川の流れに対して垂直でなく、斜めに架かっていること。いわゆる斜橋な



斜めに架かる桂ヶ谷水路橋

アーチを下から見た桂ヶ谷水路橋



のである。上流から見ると左岸の輪石基部が、右岸の基部よりやや上流に位置している。輪石に注目すると、右岸側から左岸側にかけて順に石材の端が上流側に突き出るように組まれている。また、天端幅(上幅)が下幅より60㍎少ない台形をしている。

この構造については、「おもしろい形だが、輪石を斜めに配置したことで、橋を回転させようとする力が加わる。このため、一般的なめがね橋に比べると、斜橋は構造的に不安定になっている」と軸丸会員。

斜橋は会報78号(通算)で紹介した熊本県人吉市の「桂橋」のほか、同人吉市の「西目林道第3・4・5橋」、宮崎県都城市山之口町の「古大内水路橋」、長崎県波佐見町の「田別当レンガ橋」がある。

滋賀県立琵琶湖博物館で写真展

「日本の石橋展」(森野秀三・会員)

全国の石橋の写真展「日本の石橋展」が、滋賀県草津市下物町の滋賀県立琵琶湖博物館「集う・使つ・創る 新空間」コーナーで、2月4日から3月8日まで開催されている。主催者は森野秀三・滋賀県会員。森野会員が撮影した写真が地域別、テーマ別のパネルで紹介されている。

地域別展示では、北海道から沖縄まで、全国各県1ヶ所以上の石橋を紹介。テーマ別では、「石の太鼓橋都市(一宮・江南・甲賀・久留米)」「西洋化政策時代の石橋」「テレビの石橋」「天井川の下を通るマンポ」「これって石橋?」など、独自の視点で全国の石橋を紹介。その他九州の石橋のある町のパンフレットを見られるコーナーも設けられた。

また森野会員は、「何も知らない人が安心して石橋の世界に入れるようにしていききたい」と考

え、昨年8月から「石橋探偵のブログ」を始め、ネットを使った情報発信も行っている。ブログは「石橋探偵」と検索すると出てくる。



展示コーナー入口

(広報部)

随想「なまえ」

会員 平野 秀子(熊本県)

愛犬の散歩をしながら石橋に出会うとき、私はいつも「ありがたい…」という思いになります。私がこの世に生を受ける以前から存在する石橋。今は橋の名前だけで、その橋を頭にイメージすることができません。

「なまえ」というと、私は子どものころ、もう少しかっこいいハイカラな名前だったら…と思った時期がありました。ところが親になり、わが子の名前を自分が付ける立場になると、子どもの幸せを願い、子どもにとっては一生付き合い回る大切なものだからと、いろいろな考え、悩むのでした。命名は親として、責任を伴う重大な行為。漢字を調べ、こんな風を読むのか、と感心したり…。そこには、わが子誕生のうれしさや、子どもへの愛情がありました。

近頃の子どもの名前には特に、日本語の難しさと素晴らしさ、そして一文字一文字に込められた、家族の深い愛情を感じられます。

橋は地名など、分かりやすい名前が付けられているように思いますが、その橋の由来や当時のことを知ると、本当に重いものを感じます。そして「先人の皆さま、大切なものを残してくださいと、本当にありがたいとございます」と、感謝の言葉が湧いてきます。

めがね橋の構造と強さ[1]

会員 軸丸英頭(熊本県)

地域の宝物「めがね橋」。これからも「使い守っていただく」には、その「構造」と「強さ」について知っておくことが必要です。今回から3回にわたり、それを考えてみます。

めがね橋の特徴

石は圧縮に強く、引張

りに弱い材料です。めがね橋はこの性質を生かし、ア

左が通潤橋(熊本・山都町)、右が大窪橋(同・美里町) 写真提供/軸丸英頭



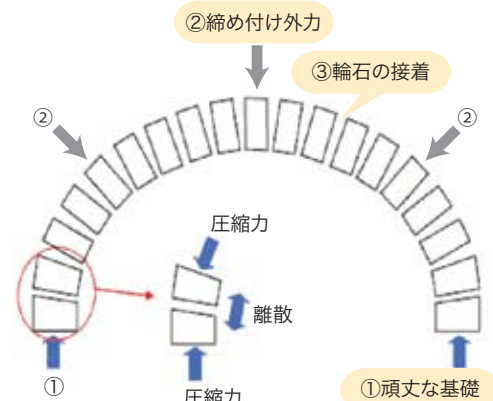
ーチ型に輪石を組むことで、タガを締めた桶のように、接触面に圧縮力を働かせ安定を保っている構造体です。

輪石を締め付けるタガの働きは、①アーチを支える頑丈な基礎②アーチを外から押さえる強い力③輪石同士の接着—などが担っています。

めがね橋は、地震の揺れをも吸収する柔軟な構造ですが、いったんタガが緩むと、一気に崩壊する危険性もはらんでいるのです。

洪水への備え

めがね橋が崩壊する原因のほとんどは洪水です。浮力が働く水中で、強い水压を受けると石組みが緩み崩れやすくなるのです。対策としては、次の事例があります。



めがね橋の「3つのタガ」

(1) 洪水を受けない工夫

橋に洪水を受けない備えでは、河川バイパス(荒尾市の岩本橋等)、ダムによる流量調整(美里町の霊台橋等)、高位置でのアーチ整備(美里町の大窪橋等)が挙げられます。

(2) 側面の補強

通潤橋のような鞘(さや)石垣などで弱点となる橋の側面を補強することも効果的な備えです。

(3) 輪石の接着

諫早眼鏡橋のようにくさび型の鉄片による輪石の連結や、長崎眼鏡橋のような漆喰での輪石接触面の強化も有効です。

(次号へつづく)

会報78号2面掲載

「千葉県、埼玉県の石橋」の寺坂橋

会報78(第2版)号で紹介した寺坂橋の最初の報告者は、埼玉県の吉田晃会員でした。本号では写真とともに再度紹介します。



寺坂橋 写真提供/野田 民生

寺坂橋(てらさかはし)

所在地 埼玉県本庄市内(元小山川)
構造 群馬県の神山石使用アーチ橋
現状 一部コンクリート補修
架設年 1889(明治22)年
設計者 パウナル?
※.パウナルは、新越本線碓氷峠のれんが造りのアーチ橋を設計した英国人

安山岩もそうなのか

「黒肥地さん、ここは加久藤カルデラから近いので、石材は溶結凝灰岩だと思いましたが、この粒々の面を見ると、違うようです」

「はあ、凝灰岩とは違うごたつですね。こん青みががったつは何ですか」

昨年5月、熊本県人吉市在住の黒肥地改太郎さん(会員)に案内していただき、市内木地屋町を流れる椿谷川に架かる5つのめがね橋を調査したが、用材の判別ができなかった。

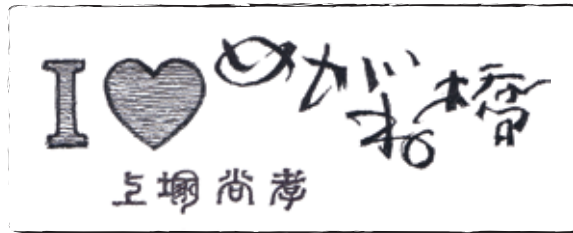
熊本県内の山間地は溶結凝灰岩を用いためがね橋がほとんどで、海沿いに砂岩の橋が見られる。そのどちらでもない石材は何かと首をひねった。帰宅し表層地質図を見たところ、安山岩が分布している。それにしても見てきたのは異質な安山岩だった。

話題は、熊本県水俣市と鹿児島県出水市の県境に架かる「境橋」の石材に変わる。この橋の輪石の縁は安山岩とみた。輪石中央部や壁石は赤みがかったりするので、私は溶結凝灰岩ではないかと思っただが、阿蘇火山博物館の池辺伸一郎館長に尋ねてみたところ、「あの付近なら安山岩でしょう」との答え。後日、館長は自ら現地に行かれ、安山岩であることを確認された。ピンク石は溶結凝灰岩であるという固定概念があったため、私は誤った見方をしていたようである。

地質調査研究をする株式会社アバンスの工藤伸さん・岩内明子さんとの面識ができたことで、昨年夏に東陽石匠館

で「めがね橋に用いられた石材」の展示会を開催したが、その際に教わったことは、水俣周辺から人吉にかけて、「肥薩火山岩類」があることだった。アバンス

さんが現地を確認された結果、輝石安山岩と判明した。早速、黒肥地さんにそのことを伝えた。



付け加えると、熊本市内に架かる「明八橋」の石材は、金峰山の裾野の石神山から採った通称「島崎石」で、これは角閃石安山岩。明八橋上流に架かる「明十橋」の輪石も同じであるとのこと。

足元のことを知らぬままで過ごしてきたことの多さに、我ながらあきればかり…。(2011年7月2日)

真夏の夜の夢

人間は喜寿の祝いを過ぎると、若いころに比べ、どうしても喜怒哀楽の感情が

薄れてくる。ところが銀座熊本館勤務の女性Kさんから電話があり、「緑川流域の石橋を見たいと、3人の女優さんがそちらへ行かれます。10月下旬です」という連絡を受けたときは、年甲斐もなくワクワクした。

受話器を持ったまま興味湧いて、その女優さんとは誰だろうか、と尋ねると、「司葉子さんと藤村志保さん、もちろんお名前をご存じですよ。それに吉永小百合さんです」とKさん。私はうれしさと緊張で胸の鼓動が高鳴った。

時が経ち、冷静になったところで、自分の胸の高鳴りの理由に思いあたった。私は教師になつて2年目、プロ野球草創期の名投手だった、澤村栄治をモデルにした映画「不滅の熱球」を見に行ったことがある。出演は澤村役を池部良、その恋人役が新人の司葉子だった。この映画での彼女の清楚な美貌が脳裏にこびり付いていたのだ。

それから10年後の夏、プロ野球のオールスター戦が千住の東京スタジアムで開催された。上京していた私は観戦後、ネット裏の席にいた和服の司葉子さんを見つけ、サインをお願いした。彼女は私の差し出した万年筆を快く受け取り、念入りに草書体のサインをしてくれた。その所作には気品があり、彼女の育ちの良さを感じた。

次の年の夏も上京した。夕方、渋谷の

松濤公園でテレビドラマ「呑気眼鏡」の口ケをやつていて、緒形拳さんと藤村志保さんの姿が見えた。口ケの休暇時間にお二人にサインをお願いしたところ、緒形拳さんは個性横溢(おういつ)に、手持ちのスケッチブックに大きく無骨にサインしてくれた。対照的に浴衣姿の藤村志保さんは、流麗な筆遣いで、つい「お上手」と褒めたくなる行書体の文字。

小学6年生を引率して長崎への修学旅行で平和公園に到着すると、吉永小百合さんを見つけた。雑誌の写真撮影らしく、相手役の浜田光夫さんとポーズをとつていた。映画や雑誌では目にしていただけ、実物の吉永小百合さんを見て、新鮮な美しさとおしとやかさを兼ね備えた類いまれな女性だと思った。撮影が一段落したところで、私がサインのもらい方の範を示し、引率の子らがそれに続いた。

このように私のミューザー心を書き並べると、緑川流域の石橋見物に来るという3女優は、私から見れば偶然サインを頂戴した方という共通点があり、話が出来過ぎている。

まあ、それはともあれ、熊本のめがね橋の存在を知つていただき、価値を見いだしていただくには絶好の機会。くれぐれも美貌に見ほれ、案内が雑にならぬよう、また足元不用意にならぬようにいたすが肝要。(2011年8月13日)

石橋のふる風



石原 史彦「二俣橋」
二俣橋／熊本県下益城郡美里町

「二俣橋」と出会って、かれこれ30年以上にもなる。初めて買った一眼レフカメラを抱えて撮った橋だ。アーチの向こう側にもう一つのアーチが見える。石橋ファンにとつては、何ともうれい構図。木版画にしてみたかった第一作目のモチーフになった。(熊本県会員、木版画、2009年作品)

「二俣橋」と出会って、かれこれ30年以上にもなる。初めて買った一眼レフカメラを抱えて撮った橋だ。アーチの向こう側にもう一つのアーチが見える。石橋ファンにとつては、何ともうれい構図。木版画にしてみたかった第一作目のモチーフになった。(熊本県会員、木版画、2009年作品)

見たり、聞いたり、

会員 井澤るり子(熊本県)
石工、利八(理八)

昭和40(1965)年に流失した、下益城郡砥用町(現美里町)の下鶴(下津留)橋。「砥用町史(『砥用町の石造眼鏡橋』太田静六著より)」に掲載された写真を見ると、大窪橋によく似ているものの、中央部がやや盛り上がり、厚みは少なく、端正な表情を見せている。

「現在の下鶴橋は新道が別にできたので余り用いられなくなったが、以前は其(その)の価値が極めて大きかった」と町史

には記載され、橋のたもとにあった架橋記念碑には、「車通遍可ら須」(くるまとおるべからず)という文字とともに、この橋の石工棟梁が甲佐平の理八であったことが紹介されている。

理八に関し「町誌中央」には、次の記載がある。「ここが岩野井手開鑿(さく)の時の最大の難工事であった。当時岩山を削り、また割ったりした矢の跡形が数カ所残っている。そしてこの工事の石工は、砥用手永甲佐平村、利八、太八と刻まれている」。この利八と理八は同一人物と考えていい。利八は、岩野用水工事の中で最も難工事とされた、天狗岩石場の石工棟梁を務めたのである。

鹿児島市の石橋記念館でDVD付き展示解説書販売



DVD付き展示解説書(500円)
鹿児島県立 石橋記念館
〒892-0812 鹿児島市浜町1-3
☎099(248)6661

江戸末期、肥後の名工、岩永三五郎が薩摩藩に招かれ架設した西田橋、高麗橋、玉江橋が移設・復元されている石橋記念公園。公園内の石橋記念館では、西田橋解体・復元工事の記録が、DVD付き展示解説書として販売されている。

利八は、天保14(1843)年10月に下鶴橋架橋工事を終え、弘化2(1845)年11月岩野用水工事、同3(1846)年から翌年にかけて、霊台橋工事でも活躍した。岩野用水工事は天保12(1841)年から始まっているが、利八が下鶴橋の工事と掛け持ちしたとは思えず、下鶴橋が終わった後、天狗岩に取り組んだ可能性もある。難工事ゆえ、腕を見込まれたのかもしれない。地元の人々も認めた腕前だったのだろう。

美里町は石橋の町として、かつて活躍した石工の痕跡を見過ごすことなく、これからも石橋を大切にしていきたいものだ。

日本の石橋を守る会 ～石橋とその文化を大切に～

会報80号(通算) 2012(平成24)年2月29日発行

代表者 会長 甲斐利幸
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www10.plala.or.jp/narit/>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>

編集後記

本号では、古い石橋を維持・保存するための重要な一歩として、昨年行われた肥後種山石工技術継承講座に多くの紙面を充てました。今後の展開に期待したいところです。

ところで本号は通算80号。会報が「日本の石橋を守る会」の歩みとともにあったことを思うと、その重みを感じます。また石橋への会員の思いは、今も変わらず、深く強いものがあります。

ただ皆さんの関心の対象は、それぞれに違い多様なようです。そうになると、会報の内容も多様にするのが自然。できれば石橋ファンの心が響き合うような内容になれば……などと思つ次第です。

(会報担当) 中村まさあき